「柏崎の橋」　３３　本達橋（ほんだつばし）

本達橋は、半田地内を流れる源太川に架かる橋である。現在の新本達橋の西側約１０メートルの位置にあり、本辰橋という表記もある。

新本達橋

源太川は、上田尻から佐藤池新田、半田、穂波町を経て関町で鵜川に合流するがその起源は、承応２年（１６５３年）に佐藤池の干拓が始まったことに伴い、新たに源太川を開削したことによる。

源太川の開削に関して、佐藤池村ではそれまで排水が不十分で荒れ果てていた佐藤池が新田開発される、枇杷島村ではそれまで鯖石川の末水が用水であるため用水確保に苦慮していたが源太川から直接佐藤池の水を引くことができる、という利点があった。

一方半田村では、それまで用水の大部分を佐藤池に頼っていたため、源太川開削による用水量減少が、その後の用水量確保の訴訟の原因になった。

柏崎文庫には、「本立（達）橋　佐藤ケ池堀割の新江に架す　享保十七年五月十六日訴訟　長岡御預り所出雲崎御役所にて裁判　橋ぶしんは佐藤ケ池村にて為し　道の修覆は半田村に於て為べしト」との記述があるが、上記のような各集落の利害の相違が反映されたものと推察される。（享保１７年は１７３２年）

佐藤池・源太川をめぐっては、近年でも用水、水害対策に関する事業が行われている。昭和２８年度から昭和３０年度に渡る土地改良工事で佐藤池、源太川の切替工事が行われ、平成１９年には佐藤池球場脇に源太川調整池と分水路が整備され、翌年には関町の源太川排水機場にポンプが増設された。

新本達橋から本達橋を望む

昭和５３年に半田小学校が開校し、その後当時の柏崎土地開発公社が半田住宅団地を売り出したこともあり、市道柏崎７-１１６号線が半田小学校の東側に新設された。新本達橋がこの市道上に昭和５７年に架けられて以来、本達橋が担ってきた地域交通の主たる役割は、新本達橋に譲られている。

●参考にした本

半田・岩上の暮らし（３８２　ハン）半田・岩上郷土史研究会編
柏崎歳時記　山田良平著　（９１０　ヤマ）
柏崎文庫 第１５巻（０８０ セキ）関　甲子次郎　著
柏崎編年史　新沢佳大編著　（２２４　シン）